

おかあさん、 おいてかないで

A・ボイネシティ さく

サレナ・ドラガン やく

赤坂 三好 え



作者 A・ボイネシティ (Al. Brătescu-Voinești)

アル・ブラテスク・ボイネシティ。

1868年、ルーマニアに生まれる。ブカレスト大学で法律学を修める。主な作品に、「闇と光」(1912)、「平和に尽して」(1920)、「パンくず」(1929)、「夕焼けの果てから」(1935)などがある。本書はルーマニアの小学生が必ず読書する代表的作品。1946年ブカレストでなくなる。



訳者 サレナ・ドラガン (Salena Drăgan)

1950年、ルーマニアのブライラに生まれる。ブカレスト大学でサイバネチックスを学ぶかわら、日本文化に対して興味を抱いて、日本語を習い始める。日本とルーマニアの、それぞれの児童文学や現代短編小説の翻訳に意欲的。1983年9月に来日、現在日本語専修生。本名＝リアナ・トルファシュ (Liana Trufașu)



画家 赤坂三好 (あかさかみよし)

1937年、東京に生まれる。専門は版画。「かまくら」で、'73年BIB世界絵本原画展金牌賞、「十二さま」で、'73年小学館絵画賞・'75年BIB世界絵本原画展金牌賞を受賞。本書の舞台のルーマニアには、1969年と1971年の二度各地を訪問している。



ポプラ社の世界どうわの本・8

おかあさん、おいてかないで

定価 680円

1985年1月 第1刷◎

- 作 者 A・ボイネシティ
- 訳 者 サレナ・ドラガン
- 画 家 赤坂三好(あかさかみよし)
- 発行者 田中治夫
- 発行所 株式会社 ポプラ社
- 製 版 株式会社光明社
- 印 刷 名古屋美術印刷株式会社
- 製 本 大成紙工業所

東京都新宿区須賀町5
〒160 振替東京4-149271

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©サレナ・ドラガン、赤坂三好 Printed in Japan

N.D.C.979/71p/22cm

4-591-01688-9

おかあさん、 おいてかないで

A・ボイネシティ さく

サレナ・ドラガン やく

赤坂 三好 え



PUIUL
by
Al. Brătescu-Voinești

うららかな、ある春はるの日のことです。

とおくはなれたアフリカあふりかの草原そうげんからとんできた。一羽わのうずらが、やぶのはずれにあるむぎ畑ばいのなかに、おりたちました。

うずらは、死ぬしほどつかれていました。

二、三日にち、ゆっくりからだをやすめると、うずらはむぎ畑ばいのなかをあるきまわり、ぼうのきれはしや、かれ葉はなどをひろいあつめました。そして、水みずびたしにならないように、もり土つちのうえに、小ちいきなすをつくり

ました。

うずらはそのなかに、じつとうずくまると、つぎつぎと、七つのタマゴをうみました。

七つのタマゴは小さくて、それはそれはかわいらしいタマゴでした。うずらはそのタマゴをおなかのしたにだきかかえて、あたためはじめました。

うずらは、用心ぶかく、風かぜにゆれるむぎのほにも、その音おとにも気きをつけながら、くる日も、くる日も、じつとすのなかにうずくまっていきました。



そのあいだに、どしやぶりの雨あめがなんどかふりました。けれども、うずらはタマゴたまごに雨あめがすこしもかからないように、身みうごきひとつしませんでした。

三週間しゅうかんほどたった、ある日ひの朝あさのことです。

うずらのおなかのしたから、

「ピー、ピー、ピー……。」

という、かわいらしいなき声こえがきこえて、七羽わのひなが、つぎつぎとかおをだしました。

うずらのひなは、毛けのないすずめのひなのように、
まるはだかではありません。ひよことおなじように、
やわらかなきいろいうぶ毛げにおおわれていました。ま
るでまゆだまのようでしたが、生うまれたばかりなのに、
もうえさをさがして、あたりをせかせかあるきまわつ
ていました。

おかあさんうずらは、しんぱいで、目めがはなせませ
ん。

アあリヤバぼツたをつかまえては、こなごなにして、ひ



なにやりました。ひなたちは、小さ^{ちい}なくちばしでおかあさんのくれるえさをついばみ、むちゅうでたべていました。

七羽^わのひなたちは、おかあさんのいうことをきく、ほんとうにかわいらしい、すなおな子^こたちでした。

いつもおかあさんの近^{ちか}くにいて、おかあさんが大^{おお}きな声^{こえ}で、

「^ひび^ぱら^らく」

とよぶと、すぐにかけもどつてきました。

六月がつのある日ひのことです。

近ちかくにすむ農夫のうふたちが、畑はたけにむぎかりにやつてきま
した。

あぶないとおもったおかあさんうずらは、大おおいそぎ
でみんなをよびよせました。

けれども、いちばんはじめに生うまれたにいさんうず
らだけは、すぐにもどつてはきません。にいさんうず
らは、まだとぶことさえできないのに、よくひとりだ



けで、とおくまでさんぼすることがあつたのです。

畑^{はたけ}にやつてきたわかい農夫^{のうふ}のひとりが、じぶんの足^{あし}

もとをよちよちあるいていくうずらのひなをみつけた。そして、すばやく、ぼうしをあみのかわりにして、すくいあげました。

わかい農夫^{のうふ}の大きな手^{おおて}ににぎりしめられて、おどろいたのは、にいさんうずらです。おびえた声^{こえ}をあげながらふるえました。それはどんなにおそろしかったことでしょう。



小さなひなのむねは、時計の音のように、どきどき
していました。

わかい農夫は、つかまえたうずらのひなを、ほかの
農夫たちのところへ見せにきました。すると、年を
とつた農夫がいました。

「マリネさん、かわいそうだよ。そのうずらは、まだ
生まれたばかりのあかちゃんだ。えさもひとりではた
べられない。親もとをはなれたら、すぐに死んでしま
うよ。はなしてやったらどうだね。」

年をとつた農夫は、パイプのけむりを口からはきながらいいました。

にいさんうずらは、よくよく運がよかつたのです。
わかい農夫の手からのがれたにいさんうずらは、すくわれたことがわかつて、まだびくびくしていません。そしてせかせかあるきながら、畑のうねをこえ、いまおこつたことをはなそうと、むちゆうでおかあさんのところへ、もどつていきました。

おかあさんうずらは、そのひなをじぶんのむねにひ